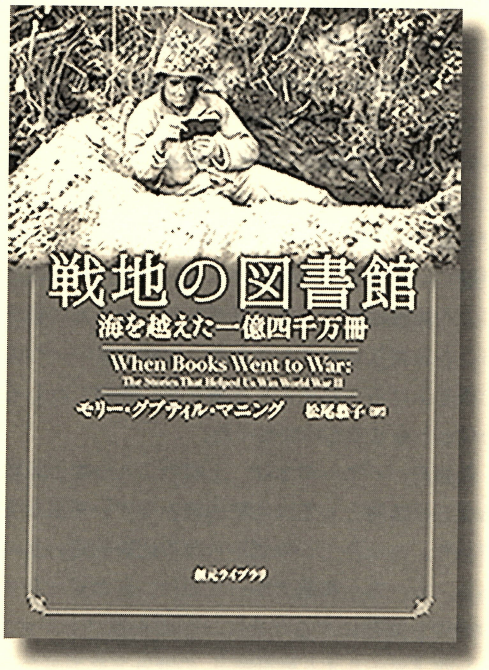
学生に読ませたい本

公文　孝佳

『戦地の図書館 海を越えた一億四千万冊』（東京創元社 2016 年；創元ライブラリ文庫 2020 年）

モリー・グプティル・マニング　著／松尾 恭子　訳



戦争と本の組み合わせは色々考えられましょうが、「戦地と本」となると、中々想像がつかないのではないでしょうか。人間は究極の状況下に置かれると、自分がいた日常を懐かしむようになります。そこでは活字すらも兵隊にとっては束の間現状を忘れるための手段となります。一例をあげると、推理小説の名作の一つ、パット・マガーの『被害者を捜せ！』（創元推理文庫）では、ある部隊で、実家から送られてきた小包の中にあった古新聞中の殺人の記事をめぐって兵隊たちが被害者はだれかとにぎやかに推理を巡らします。

本書は、第二次大戦中、最前線にいる兵隊たちに娯楽として届けられた書物が、兵士が「人間であり続けること」を助けた物語といっても過言ではありません。

第二次大戦がはじまって比較的すぐ、米国では戦地に送る兵隊に送る本を集める運動が始まり、当初は図書館などを中心とする戦勝図書運動となります。しかし、サイズも種類も、そしてジャンルも雑多な本を集めて送る運動はすぐに限界に達します。その失敗を受け、軍の補給部門などが中心となって本格的に兵士への書物の供給を検討し始め、出版界で戦時図書審議会の誕生をみます。当初はラジオ放送をはじめとする、兵士への様々なサービスが模索されますが、1943 年、「規格化されたサイズのペーパーバック」である「兵隊文庫」が誕生します。ここにいたり、次の段階で「どのようなものがふさわしいか？」ということが模索され、「教科書・技術書・児童書・女性向けの本以外のあらゆるもの」がその対象となり、1200 ものタイトルの書物が兵隊文庫として生まれることになります。これらは、米兵の行くところに行きわたり、戦場で一瞬に訪れる安らぎを兵隊に与えたのです。兵隊たちは争って兵隊文庫を求め、そして暇を見つけては酷暑や寒冷地の戦場で読みふけり、ついには作者に手紙を出すようになります。作者もまた、太平洋や大西洋の

彼方から送られてくる手紙に応え、兵士との交流も生まれていきます。

戦時中に戦場で本を読んだ青年たちには「その後」の物語がありました。それが本書の最後を締めくくります。復員兵たちをどう遇するかが国家的問題であったところ、時の米政府は戦時中から、復員した兵隊たちに職業訓練プログラムや大学進学の支援をする法律を整備していました。

そして、戦後すぐに後者を拡大したため、多くの者に大学進学の道が開かれ、多くの兵士たちが大学で学ぶことができるようになったのです。そこでは兵士たちは同級生たちに畏敬されるようになっていくのです、「平均点をあげる忌々しい奴ら」として。そう、彼らはすでに戦場で兵隊文庫でかなりの勉強をしていたのです。読書習慣がなかった者が戦場でその習慣を身に着け、そして、大学で学ぶ基礎的素養も身に着けるにまで至っていたのでした。

「戦地と書物」という少し奇妙な組み合わせで本書は、さまざまな物語を提供してくれます。活字離れが加速化している今、人間と書物の戦争という極限の中での結びつき、そして書物が苦境にある人間にどのように寄り添ったのかを描くこの物語を読むことで、書物という古い情報媒体がどのような機能を果たし得たのか、その一つについて感動を得ることができるでしょう。

・・・そしてこれを書くために改めて僕は手に取ったのですが、僕はまた、しなければならないことをほったらかしにして、活字に向かいたくなるのでした。

（法学部教授：刑事訴訟法専攻）